

## 広瀬旭荘の漢詩と松江一嘉永7年山陰紀行と美保関三代家

(松江城・史料調査課歴史史料専門調査員／村角紀子／2023年6月9日記)

### ●はじめに

令和5年(2023)4月5日、松江市美保関町在住の三代暢實(みしろ・のぶみ)さんから松江市へ、江戸時代後期の儒学者・漢詩人の広瀬旭荘の漢詩軸4点が寄贈されました【写真1、2】。翌日には上定昭仁市長のツイッター、インスタグラムでも報告されたので、目に留められた方も多いのではないのでしょうか。



【写真1】上定市長より三代暢實さんへ感謝状贈呈



【写真2】寄贈された漢詩軸の前に記念撮影

今回はこの寄贈に至る背景のご紹介を兼ね、そもそもなぜ旭荘の漢詩が松江市にあったのかを紐解いてみます。

### ●三代家の襖

美保関町の青石畳通りにある三代家は、江戸時代には屋号を「米子屋」という船問屋でした【写真3】。住宅主屋は令和3年(2021)に国の有形文化財(建造物)に登録されています。明治維新後は松江藩から買い受けた蠟燭業を営んで財を成し、美保関村議長、村長なども務めました。昭和初期にはモータリゼーションの到来を予見して松江駅前と浜田にフォード自動車代理店の旭自動車商会を設



【写真3】三代家住宅主屋前の「米子屋」看板

立。さらに美保関自動車株式会社を創立し、手角(たすみ)から菅田町に至る県道1号線(現在の国道431号線)に乗合バスが走れるよう、私有地を無償提供して拡幅に尽力しました。戦後は合同汽船株式会社の社長に就任するなど、郷土史にその名を残す旧家です。

さて、三代暢實さんは美術コレクターでもあり、筆者は令和4年3月、ご所蔵絵画の調査のために美保関のお宅に伺いました。通された二階客間の襖4面には立派な七言絶句の漢詩が貼られており【写真4、5】、落款は「旭莊」、印は「廣瀬謙印」「梅墩」と読めます。まじまじと見ると、漢詩の中には宍道湖の雅称である「碧雲湖」の文字が。数年前、たまたま後述する広瀬旭莊の山陰紀行について調べたことがあったので、「これは旭莊が松江を詠んだ詩では？」と驚きました。三代さんに由来をうかがいましたが、特に聞いたことはないとのこと。本来の目的の作品とあわせ、襖も撮影させていただいて帰りました。



【写真4】三代家二階客間襖（2022年3月撮影）



【写真5】三代家二階客間襖（2022年3月撮影）

数日後、三代さんが長い包みを持って課を訪ねてこられました。中には黄ばんだ漢詩のまくり6枚が入っており、時期は不明ですがかつて襖に貼ってあったもので、汚れたので今の分に貼りかえたとのこと。そして「あなたにあげる。表装してあげるから好きなものを選びなさい。家に床の間くらいあるでしょう」と鷹揚に仰る。床の間もない今どきの家に住む私は丁重に辞退し、ともかくお預かりして調査することにしました。

### ●広瀬旭莊の山陰紀行

広瀬旭莊（1807-1863）は、幕府直轄領だった豊後国日田（現在の大分県日田市）の出身で、名は謙（通称謙吉）、はじめ秋村、ついで旭莊、梅墩（ばいとん）と号しました。漢詩の名手として知られ、清朝末期に編まれた日本漢詩集『東瀛詩選』（1883年刊）においては「東国詩人の冠（日本で最も優れた詩人）」と称されるほどでした。27歳から没年まで続けた漢文日記「日間瑣事備忘」も貴重な史料として知られています。

また、旭莊は日田に「咸宜園（かんぎえん）」を創設した著名な教育者・広瀬淡窓（1782-1856）の25歳下の末弟です。咸宜園は文化14年（1817）に開塾した近世日本最大規模の私塾であり、淡窓の後は旭莊・青邨・林外らが引き継ぎ、明治30年（1897）の閉塾までに全国から門弟5000名が学んだとされます。出雲国からも27名が咸宜園に入塾しており、大坂に移った旭莊の塾に学んだ者もいました。

その旭莊が山陰を旅したのは嘉永7年（1854）、48才の時です。閏7月、大坂を出発、津山から倉吉・逢坂・大山・淀江・米子・安来を通過して、9月26日に従者ととも松江城下

に入りました。この間、逢坂（鳥取県西伯郡）で大庄屋・橋井富三郎（馨亭）家に滞在し、冠雪した大山にとともに登っています。松江を出てさらに宍道・平田・今市・大社を歴訪、石見経由で故郷の日田に向かう予定でしたが、11月5日、大社で安政の大地震にあったため急遽、帰坂を決意。12月の大雪のなか赤名峠を越え、大坂へ帰って行きました【図1黒線】。



【図1】嘉永7年の広瀬旭荘の山陰紀行ルート（『百四十五年前のわが町わが村』掲載図に赤部分加筆）

卜部忠治・今岡堅一共訳『百四十五年前のわが町わが村』（出雲市教育委員会、1999年刊）は、この大旅行の倉吉から三次に至る期間の「日間瑣事備忘」を読み下して解説を付したもので、『廣瀬旭荘全集』詩文篇（思文閣出版、2010年刊）とあわせて読むと、旭荘が歩いた当時の山陰の様子、地域の文人たちとの交友が手に取るようになります。

以上を整理すると、旭荘は中海・宍道湖南側のルートを移動しており、直接、美保関を訪れることはありませんでした。三代家の旭荘の漢詩は、他の場所で書かれたものを当時入手したか（旭荘は松江滞在中に揮毫した分だけでも90両もの謝礼を得ています）、あるいは後の時代に伝わったものと考えられます。

### ●三代家の広瀬旭荘漢詩

#### (1) 襖貼付の七言絶句4首

では、あらためて三代家の旭荘の漢詩を見ていきましょう。まず、二階客間の襖に貼り付けられていたのは右側から順に以下の七言絶句4首です。

(1)

曉氣蒼花霜滿下  
水禽回泳破晴烟  
南塘荷葉摧殘尽  
昨夜雙眠何処辺

(2)

登高東望路悠々  
賢主多情忘旅愁  
莫道西陬風土異  
黃花猶似浪華秋

(3)

風吹枯葦不成声  
舟過時聞沙鳥鳴  
楓頂猶留殘照在  
一枝紅影水中明

(4)

梅花零落雨肅然  
回憶西游已隔年  
記得碧雲湖上泊  
蓬窓欹枕五更天

このうち(2)(4)は『廣瀬旭莊全集』詩文篇に収録されており、同書から(2)が「重陽在橋井氏賦似従者」(『梅墩詩鈔』卷五之二)として嘉永7年重陽(9月9日)に前述の橋井富三郎家滞在中に詠んだ詩、(4)が「春雨独座」(同前)として山陰旅行から大坂に戻った安政2年1月に詠んだ詩であることが確認できます。

下手ながら(4)を意識すると、こんな感じでしょうか。

「春雨に独り座す」

梅の花が散り、雨が静かに降っている。

既に年を隔ててしまった西への旅を思い出す。

碧雲湖(宍道湖)畔に泊まったことをようやく記せる。

粗末な家(自宅)で枕をそばだてる夜明け前のひと時。

まだ明けきらぬ中、布団の上でひとり雨の音を聞きつつ、ようやく落ち着いて去年の山陰旅行に思いを馳せる大詩人。そこで宍道湖を思い出してくれるところに、この詩を贈られた松江人は嬉しくなったことでしょう。ちょっとご当地ソングに通じるところがあります。

この「碧雲湖」という雅称、大正4年(1915)には宍道湖に浮かぶ嫁が島に「碧雲湖權(棹)歌」石碑が建てられるほど普及していましたが、実のところ、いつから使われはじめたかは分かりません。『廣瀬旭莊全集』詩文篇を見る限り、松江滞在中の旭莊はこの言葉を使っていないので、遠きにありて松江を思う旭莊の造語だった可能性もなくはないかもしれません。

## (2) まくりの七言絶句6首

一方、三代さんから届けられたまくりは、以下の七言絶句6首でした。

(5)

濤頭起立入雲間  
不見青山見雪山  
此是蜻蜓洲尽处  
漁舟一々破天還

(6)

花尤易散是山桜  
燥湿常憂難得平  
多謝老天調理妙  
不成雨又不成晴

(7)

一室清香冷夢魂  
曉寒不浚出柴門  
孤山残雪羅浮月  
収在吾家小瓦盆

(8)

平野渺然千万疇  
四時風物自清幽  
尤宜天外無雲日  
一角盤山对此楼

(9)

残寒拔雪太無情  
勒住東風出告鶯  
却是紙鳶張氣勢  
飛揚天半美春声

(10)

風枝露葉無塵垢  
直節虚心耐雪霜  
晋代七賢唐六逸  
官情総為此君忘

このうち (5) (6) (10) が『廣瀬旭莊全集』詩文篇に収録されています。同書によると、(5) が「歩澗江海上」(『梅墩詩鈔』卷五之二)として嘉永7年9月中旬に淀江で詠んだ詩、(6) が「春陰有感」(『梅墩詩鈔』卷五之一)として同年仲春(2月)旅行前に詠んだ詩、(10) が「竹二首」(『梅墩詩鈔』卷五之二)の一つで、おそらく同年10月に平田の通伝寺あたりで詠んだ詩と考えられます。また、前掲『百四十五年前のわが町わが村』には、(8)と同じ詩が通伝寺に伝わっていると紹介されています。

そして、山陰の地形を頭に入れてこれらを読むと、(5)【写真6】は淀江から北側の美保関を眺めて詠んだものと解釈できます【図1、赤線参照】。意識すると次のような感じでしょうか。

「澗(淀)江の海上を歩く」

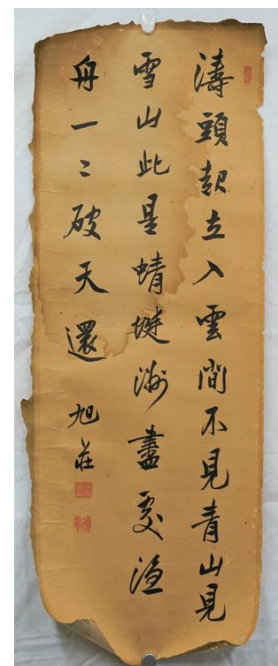
波頭が立ち上がり雲の間に入る。

青山を見ずして雪山を見る。

ここはまさに蜻蛉洲(日本)の尽きるところ。

漁舟が一つ一つ天を破って還っていく。

前には視界いっぱいの空と波、振りあおげば冠雪した大山、向こうには島根半島の東端(美保関)が見え、まさに我が国がそこで尽きている。「蜻蛉洲(せいていしゅう)」とは、出典が『古事記』にさかのぼる「秋津島(あきつしま)」と同様、日本の本州のかたちをトンボに例えた古称です。古代神話や前年にあった黒船来航も想起させる、旭莊らしいスケールの大きな詩といえるでしょう。



【写真6】漢詩まくり(5)

## ●むすびにかえて一残る謎

さて、令和4年6月、以上の読解の結果を『百四十五年前のわが町わが村』のコピーを添えて三代さんにご報告し、まくりの漢詩6枚も無事ご返却しました。

そこに記録された幕末の旭荘の足跡と、地域の人々との深い交流にいたく感動された三代さんは、これらの漢詩は広く公開すべき大事なものだと考えられ、(1)から(4)を襖から剥がして展示しやすいよう軸装して松江市に寄贈することにされたのです。

そして、まくりのうち、美保関を詠んだものであることが分かった(5)は、(6)とあわせて二枚折屏風に仕立てて手元に残され、残る4枚も染みなどをきれいにした上で、あらためて客間の襖に貼りなおされました。

最後に、(4)の「春雨独座」の詩について、先ほど、これは旭荘が山陰旅行から大坂に戻った明るる年、安政2年1月に詠んだもの、と書きました。ということは、三代家の漢詩は松江滞在時に揮毫して当地に残されたものではありません。どうやって大坂から松江に届いたのでしょうか。これが残る謎です。

旭荘の安政2年1月19日の日記（「日間瑣事備忘」第106巻）には、以下のように記されていました。

使淡路属寄作雲石故人束十余通於島又〔中略〕皆録近作詩寄之

すなわち旭荘は、雲州・石州旅行を予定している「島又」（島屋又四郎）の元に弟子の「淡路」（秦淡路、雲州塩冶出身で当時旭荘塾に入門中）をつかわし、同地の知人への手紙十余通と「近作詩」を託したのです。三代家に伝わる漢詩もこの中に含まれていたのでしょうか？あるいは別の方法で届けられたのでしょうか？「米子屋」との関係は？これらは今後、「日間瑣事備忘」の続きを読み解いて考えていきたいと思います。

---

### 【参考文献】

- ・ 『廣瀬旭荘全集』日記篇5（「日間瑣事備忘」86～106巻：嘉永5年8月13日～安政2年2月10日）、思文閣出版、1983年刊
- ・ 卜部忠治、今岡堅一共訳『百四十五年前のわが町わが村—広瀬旭荘の山陰紀行—』出雲市教育委員会、1999年刊
- ・ 大野修作『日本漢詩人選集16：広瀬旭荘』研文出版、1999年刊
- ・ 『廣瀬旭荘全集』詩文篇、思文閣出版、2010年刊
- ・ 岡宏三「塩冶神社の歴史と秦家」『塩冶・秦家資料調査報告』出雲文化伝承館、2016年刊
- ・ 三代暢實著刊『散文集：風と潮の間に間に』2020年刊